

わたしたちの郷土・研究

私の通学路

～バスは城下を駆け巡る～
水戸、人々の暮らし

茨城大学教育学部附属中学校

2年3組

酒井紗綾

1・研究のきっかけ

私は通学路にバスを利用しています。

水戸駅から中学校への最寄りの停留所「袴塚2丁目」までの約20分間、満員の通学バスから見える景色は車が行き交い、オフィスや商店が並んでいます。使い始めて約2年、車窓を流れる景色はなじみの風景へと変わりました。目を引く看板やモニュメントはいつしか自分の中で目印になり、いつも変わらずそこにあることを確かめて通過します。木が芽吹き花が咲き、やがて色づく季節の移ろいや、古い建物が取り壊され、新しい建物ができてゆく過程など、日々変化する街の様子を観察しています。それはまるで大きな絵巻物を見ているようです。

この景色の中にどれほどの人々の生活や人生があるのだろう、どのような経緯があって、今の風景になったのだろうか、だんだんとそのような事を考えるようになりました。毎日乗車していると、バスから見える街の歴史や人々の暮らしを、路線に沿って探してみたいと思うようになりました。また、バスから途中下車し、通学路の周りを歩いてみたい、周辺の歴史を調べてもっとよく知りたいと思うようにもなりました。新たな知識を得れば、同じ風景も異なった形で見えてくるかもしれません。

そこで今回の研究をきっかけにして、バスでの通学路とその周辺を一度、丹念に調べてみることにしました。

2・研究のすすめ方

- ・ 路線に沿って調べを進める。
路線順に気が付いた事をピックアップする。疑問に思ったことは書きだし明確にする。
- ・ 図書館で昔の写真や水戸市街地図を参照する。
水戸市立図書館アーカイブス「水戸の町名」「水戸市の地図」を研究のベースにしました。
また水戸の昔の写真は「水戸百年」を大変、参考にしました。
- ・ バスを降りて歩く。
現場を検証する。そこで気が付いたことを書き出す。
- ・ 現地でインタビューする。
生きた証言を聞く事を重要ミッションにしました。
- ・ 関連する催しがあれば行ってみる。関連施設があれば行ってみる。
- ・ 検証や証言を踏まえてバスに乗る。

→ 結果：何か違う風景が見えてくるかもしれません。

バスの窓に流れる水戸の街は生き生きと鮮やかです。

茨城交通バス・水戸駅北口7番のりばから「茨城大学行き」に乗車、いざ出発です。

3・研究したこと～バスに乗って～

水戸駅前のロータリーを抜けると右手に大銀杏が見えます。1945年8月2日の水戸空襲で焼けながらも、翌春に黒くなった幹から芽を吹かせ、以後、水戸のシンボルツリーとして親しまれています。大銀杏脇の坂を上ると弘道館・水戸城跡地になります。樹齢300年とも言われるこの木は、お城と城下の境目にありました。毎日この銀杏を見ることによって、季節の移ろいを感じています。ちなみにこの大銀杏、例年、他の銀杏よりも黄色くなるのが遅いので、長く黄葉を楽しむことができます。



バスは銀杏並木の「国道50号」を進みます。街灯も銀杏のデザインで夜は華やかになります。左手には水戸東照宮があり、門前には宮下銀座がにぎわいます。

中央郵便局のカーブを過ぎると、ケヤキ並木に変わりました。バスは南町に入ります。江戸時代の地図を見ると、国道50号はこのあたりから既に道で、城下町の大通りだったことが分かります。進行方向左手に水戸藩9代藩主の徳川斉昭像が見えます。バスは南町2丁目から南町3丁目へと進んでゆきます。



南町商店街のアーケードが続きます。専門店が並びとても賑やかです。進行方向右手に彰考館総裁も務めた水戸藩士・会沢正志齋の像が見えます。正志齋はそのころ頻繁に起こり始めた外国船の日本上陸や幕府の体制に大きな危機感を持ち、海防や攘夷を強く唱えました。通称「南街塾」と呼ばれた私塾には水戸藩以外からも多くの人が集まりました。この像があるところは彼の屋敷があったあたりとされています。

また像がある建物のほぼ裏側には、吉田松陰が東北へ向かう途中、水戸に一月滞在し、正志齋とも交流した事が記された碑と看板があります。幕末の志士たちにとって水戸は憧れの地だったそうです。それは大日本史の編纂事業を大もとに

した水戸学が確立されていたからだと思います。正志斎の書いた「新論」は幕末志士たちに読まれ、松下村塾のテキストとしても使われたそうです。先見的な水戸の考え方は、多くの若い武士の思想に影響を与えることになりました。正志斎はまさに水戸学を作り上げた人。幕末、この場所から水戸学が発信されていたのだと感じました。

アーケードが終わり、15代将軍・徳川慶喜が腰を据えて見つめる交差点を抜けます。

バスは泉町に入りました。

少しカーブしているのは、かつてはここが広小路で、含みがあった道路を曲がらずに進めるよう伸ばした名残だからです。「水戸百年」に載っていた資料を見ていて、この泉町広小路に大きな柳の木が写っている古い写真が2枚あり、とても印象的だったのですが、恐らく同じであろうところに今も柳の木が生えていることにある日、突然気が付き、とてもうれしくなりました。初代は水戸空襲で焼けてしまったそうですが、その名残で水戸市がここに柳を植えたそうです。昭和初期までその大柳の下に夜市がたったそうですが、今もまちフェスの日は道の中にまで一面お店がたちます。



左手に京成デパート、右に水戸芸術館のシンボルタワーが見えます。泉町は銀行、信用金庫、はんこ屋さん和金融機関が多いのが特徴です。

水戸芸術館は水戸市政100周年記念事業として1990年(平成2年)に開館しました。タワーは、市政100年にちなんで100メートルの高さです。私は何かで高さの目安を付けたいとき、芸術館のタワーを目安にして、高さの感覚をつかむようにしています。今年2019年、水戸市は市政130年を迎え、来年、芸術館は30歳になります。

大通りから抜ける路地になじみのお蕎麦屋さん「萬庵」がありました。店内に入ります。湯気が立ち、天ぷらを揚げる音が響きます。1976年(昭和51年)創業、永島匡さん・たみ子さんの夫婦お二人で、切り盛りされています。お二人にインタビューしてみます。

Q『創業43年、とても長い歴史ですがその間に街やお客さんの変化はありましたか。』
A『オフィス街にあったため、昔はお勤めの人やOLの方が食べに来ることが多かったです。県庁が移転したり、バブルがはじけてからそういったお客さんが減りました。芸術館が出来てからはコンサート帰りのお客さんが来るようになりました。また雑誌に掲載されたことが大きく影響し、その記事を見てくるお客さんが増えました。』

Q『人気のメニューは何ですか。』

A『皆さん思い思いに注文されますが、やはりその中でも納豆そばが人気です。遠くから来た観光客の方は必ず納豆そばを注文します。』

Q『名物の納豆そばはどのように生まれたのですか。』

A『お店を始めたころ、お客さんを呼ぶために何か水戸らしいメニューを作りたいと思っていた時、納豆なら健康に良さそうだし水戸らしいなと思って作りました。納豆はJA水戸で購入、地元産を使っています。』

一度、芸術館の小澤征爾館長と同じカウンターになった事があります。世界的マエストロから自分まで、周辺に生きる人々が皆、集まってくるお店でしたが、2019年(令和元年)6月20日、惜しまれながら閉店となりました。お店は取り壊され、これから市民会館の建設が始まる場所です。3年後の2022年(令和3年)にはどんな新しい景色になっているのでしょうか。

泉町は江戸時代、火事が多いことから、水にちなんだ名前に願いを込めて名付けられたそうです。城下町だったころの道がそのまま国道50号になっていますが、後に駅を背にして左側を拡張し道を広げてゆきました。そのため、右側は江戸時代の町屋の区画を残したまま、現在の建物が建てられています。江戸時代は間口の大きさが税金が決められたため、間口が狭く奥に長いのが特徴です。今もこの長方形の区画を見ることができます。



バスは大工町に向かいます。

泉町から大工町にかけて、昭和の終わりころまで、大通りから路地に入る天王町界隈には料亭や置屋が多く存在し、芸者さんが行きかっていたそうです。



バスは大工町交差点で右折します。ガソリンスタンドの前に大きな石の獅子がいます。蔡國強さんの1994年(平成6年)の作品で、双になったもう一頭の獅子は風水に基づき水戸の街の気の流れを正常に整えるため、三の丸高架橋の下、水郡線の隣にひっそりと鎮座しています。大工町の獅子は季節の花と野菜に囲まれ、にぎやかです。

右折し県道342号を進みます。地図を見るとこの道は「上水戸停車場・千波公園線」との名がついています。上水戸停車場は茨城交通茨城線および水浜線の停車場の名前だそうです。かつて水戸には鉄道の茨城線、街の中には路面電車の水浜線が走っていました。水浜線は1965年(昭和40年)茨城線は1968年(昭和43年)に廃線になり、「上水戸停車場」

自体はなくなりましたが、この道路に名称だけが残りました。

ここは千波公園から上水戸停車場を結ぶ路線のうちの一区间という訳です。



江戸時代の地図を見るとこの場所は、街を隔てる緩やかな法面だったようです。水戸は元からある高低差を利用し、濠をつくり城や街を隔ててきました。水戸城にいわゆるお堀はありません。ここは江戸時代、水戸城、五の郭と呼ばれていたそうです。右手を見るとわずかに地面が高いのがわかります。江戸時代から昭和30年代までの地図を見ると、道はありますが道幅も細く、かぎ型の曲がり角のある細道しかありません。

地図の上で、常磐大学高校の裏側に常磐小路、梅小路、桜小路、松小路、楓小路、柳小路と風情のあるかわいらしい名前の小路を見つけました。ここは今も同じ道が残っていて、うれしくなります。

T字路を突き当たり、左折します。

上水戸停車場千波公園線はしばらく国道118号線と重なって続きます。「茨城高校前」です。茨城高校(1927年創立)、水戸商業高校(1902年創立)、常磐大学高校(1922年創立)、水戸女子高校(1931年創立)、大成女子高校(1909年創立)と100年の歴史を持つ学校が点在します。さらに近くには大正から昭和初期に旧制高等学校である水戸高等学校がありました。

僅かなカーブを進みます。かぎ型道路を拡張しまっすぐに伸ばした跡地です。そのため広いスペースが生まれ、道にゆとりが出来ました。常陽銀行の壁面には周辺にあった美しい旧町名がデザインされています。1964年の新修道路記念として小森邦夫さんの彫刻作品「若い力」が飾られています。

現在、末広町となったこの一帯の旧町名は馬口、労町。街灯の看板に馬の絵が見て取れます。昭和初期まで大きな問屋が連なりました。学校に向かって道路右に栃の木、左に銀杏、それぞれの根元に紫陽花が植えられています。街灯下の看板が紫陽花になるあたりから、旧町名「谷中」界限になります。路地には建屋が整然と並び、門前町らしい賑わいが見えます。6月「保和苑入口」はあじさい祭りでも多くの人が出歩いていました。





保和苑のある桂岸寺に赴き、歴史・観光アドバイザーの鈴木實さんに案内をしていただきました。向かったのは梅雨の中あじさいが咲く保和苑…ではなく隣の敷地。ここは「回天神社」です。大きな杉の木の下に御社と忠魂塔があります。



幕末、天狗党の戦いで命を落とした藩士たちを中心に、幕末の政変等で殉難された志士が祀られています。その数なんと 1865 柱。おびただしい数に気が遠くなりました。さらに奥に福井県の敦賀から移築された練蔵があります。「回天館」です。天狗党の戦いで追討され、敦賀で捕まった水戸藩士 800 人程が、押し込められた練蔵 16 棟のうちの 1 棟を移築した蔵です。現在、蔵の中は資料館になっています。練蔵の中で散々な扱いを受け、353 名が斬首されました。もともとは敦賀にあった練蔵が 1960 年(昭和 35 年)に都市計画で整備されたのを機会に、水戸の常磐神社へ移築されました。ところがそこでも老朽化が激しくなったため、1989 年(平成元年)に現在の場所へさらに移動をし、改修され、現在に至ったそうです。

「回天」は藤田東湖の書「回天史詩」から採った名前です。「衰えた勢いをもり返し、もとの正しさに引き戻す」の意味だそうです。天を回して世の中を根本からひっくり返そうとした水戸の思いが詰まった命名を神社にしたのだと思いました。

回天神社及び回天館の隣の常磐共有墓地に藤田東湖の墓があります。藤田東湖は安政の大地震で江戸の小石川水戸藩屋敷にて亡くなりました。安政の大獄・桜田門外の変・天狗党の乱と水戸藩士が多く命を落としたこの 3 つの事件には遭遇していません。もし東湖が震災で亡くならなければ、どうなっていたでしょうか。水戸の歴史はもっと別のものだったかもしれません。東湖の子である藤田小四郎は天狗党の乱で指揮を執り処刑されています。

かつて水戸藩士たちがすさまじい気概で世の中を変えようとしていたこと、「回天」の思いに圧倒されました。幕末、水戸が歩んだ過酷な歴史に胸が押しつぶされそうになりました。保和苑のある「桂岸寺」藤田東湖や天狗党・桜田烈士らが眠る「常磐共有墓地」天狗党をまつた「回天神社」、前方後円墳の愛宕山古墳、万葉集に詠まれ竹林に囲まれた曝井。お墓や古代の遺跡が連なるこの一帯は「ロマンチックゾーン」と名付けられていますが、一角にあるこの熾烈な郷土の歴史は私の心に激しく突き刺さりしました。

いよいよ学校に近づいてきました。バスは「上水戸入口」にさしかかります。

上水戸で生まれ、アトリエを持つ広告デザイナーの富田陽華さんにお話を聞きました。

Q『子どもの頃の上水戸はどんな様子でしたか。何か特徴はありましたか。』

A『馬口労町、谷中と小売りのお店が連なる商店街で活気がありました。また家の近くを水浜線と茨城線が走っていました。小さい頃は線路に近づいてはだめだよと言われていました。水浜線は水戸と大洗を結ぶ路面電車です。1965年(昭和40年)の廃線記念は無料乗車だったので乗りました。茨城交通茨城線も走っていました。こちらは普通の鉄道です。上水戸駅で二つが発着、乗り換えと交差したので上水戸駅は大きかったです。現在、カスミ跡地になっているところですか。上水戸は準工業地帯で材木屋が多かったのも、その交通が影響しているからです。あの辺、少し道が曲がっていたり不自然に感じる場所は、元々、線路があった所です。バス停「上水戸入口」も前は「上水戸駅入口」という名称でしたよ。』

「駅」との名称はとれましたが、「入口」という名称は「上水戸停車場(上水戸駅)」に対しての「入口」だと気が付きました。水浜線の水戸市街区間は水戸駅から南町・泉町を抜け、大工町を通過し上水戸を突っ切って袴塚に到着のルートです。これはほぼ、私の使っているバスのルートと同じです。私の使うバスは大工町の石の獅子を右折しますが、水浜線の鉄道はそのまま直進し、途中、斜めに袴塚方面まで伸びて行きます。バスとは異なるルートです。異なるルート部分の鉄道跡は残っていませんが、今もそのまま道路になっていると富田さんにお聞きしたので、そこをなぞって通ってみました。



緩やかなカーブが面影らしき風情を残していました。今は住宅の中を走っている印象です。上水戸・袴塚方面へ行くことを目的とするなら、大工町を右折するあの道を使った方が便利です。利用客がバスに移ったこと、路面電車の危険性が指摘されバスが主流になったこと、乗用車やその後の自家用車の普及によって水浜線は廃線になりましたが、逆を言えばバスや乗用車の普及によって効率の良い道が整備され作られたのだと分かりました。

バスは「盲学校前」を経て、「袴塚2丁目」へ到着します。バスを降り学校へ向かいます。ここでちょっと(本当にはしませんが)寄り道をします。中学校の東側・グラウンドに沿って駐車場に続く道に小さな道標があります。どんどん進んでゆくと…「水戸工兵隊跡」の大きな石碑があります。附属中のある場所は終戦の年まで水戸工兵隊があった所です。道を隔て隣接する茨城大学には、水戸歩兵第二連隊があったそうです。



水戸の工兵隊・歩兵隊について詳しく知りたいと思っていたところ、ちょうど県立図書館で茨城郷土部隊・史料保存会の展示があり、そこでひたちなか市にある陸上自衛隊の施設学校に「史料館」があることを教えてもらいました。こちらの見学をする事になり、展示について陸上自衛隊勝田駐屯地・総務課広報の鈴木裕人一等陸尉に詳しい解説をしていただきました。



現場で戦闘に必要な施設、例えば橋を架けたり、トンネルを掘ったり濠を作るのが工兵の役割です。高台にあり那珂川を見渡せるこの場所に隊が置かれ、工兵隊は開江で爆破教練をし、長久保で架橋演習を行い、訓練をしていたそうです。工兵隊敷地内の地図を見て「架橋材料庫」「弾薬庫」「兵器庫」「縫靴工場」「営内神社」があることに驚きました。附属中の図工室の辺り、体育館の隣、畑がある辺りと場所の見当がつかます。昭和14年(1939年)の記念アルバムを見せていただきました。谷中・小貫写真館作成です。80年前の、自分が毎日過ごしている敷地の風景に不思議な気持ちになりました。



水戸工兵隊は水戸歩兵第二連隊と共にいくつものグループに解体と編成をされ、太平洋戦争中ペリリュー島やニューギニアでの壮絶な最期を迎えました。

ペリリュー島は米軍が3日で陥落させると見込んだにもかかわらず、74日間にわたる攻防戦となりました。サンゴ礁の島は井戸が掘れず、水集めが困難を極めたこと、多量の弾丸を受け、穴だらけになった水筒が展示されていました。日本兵10695名が亡くなりました。捕虜202名、生存者34名。ニューギニアは南島とは思えない寒さの標高の山を越え、病や栄養失調で多くの兵が命を落としたこと、戦後、自決した上長の「打続く作戦に疲労の極に達せる将兵に対し、さらに人として堪え得る限度を遥かに超越せる困難敢闘をいたし候。」と書かれた遺書が印象に残りました。

兵を成す一般の隊員のほとんどは郷土の人だったそうです。1968年(昭和43年)石碑が建てられました。残された人々が多く思いでここに工兵隊が存在した証と鎮魂を願って建てたのだと思います。碑が立ちすでに半世紀、碑があることを知っていても、それが何かと認識している人は少ないのではないかと思います。

学校に着きました。

以上、水戸駅前から袴塚2丁目まで通学路線をなぞってみました。

4・研究を通してわかったこと

・道の歴史を知ると面白い

前にも後にも道があります。時間もそうです。前にも後ろにも時間という道があります。行きかう人の多さだけ、それぞれの歴史が道にあります。その一つ一つがあまりにも多く深く、全てを検証することはできません。ですが道路の片隅に、あるいは名称に、かつての名残を見つけた時、その道の辿ってきた歴史、水戸の街に生きた人々の息遣いを感じる事が出来ました。そうなるとその道にぐっと愛着がわきます。そして私も今、その道を行きかう一人です。

・過酷な歴史を垣間見た

当初、路線バスの旅のような楽しい気持ちで調査を始めましたが、ところどころで過酷な水戸の歴史を目にしました。そしてそれらは強烈な印象を私に残しました。また後世を生きる人々がその記憶を留めて保護し、祀っていることも知りました。意図的に残そうとしなければ、行き交う人々の中でその歴史は忘れられてしまいます。水戸のため日本のため、かつて同じ場所を生き、郷土のために亡くなられた方へ、後から生きる人々がその思いをくみ取り、平和な時代の今にこそ、忘れないよう高い意識を持ち続けることが、郷土をよく知り、敬う事なのだと思います。亡くなられた方々は今の世の礎になっています。知ろうとし祈ることで、昔と今は繋がっています。過酷な歴史を生きた人たちに祈りをささげられる、水戸は歴史と誇りと品位のある街なのだと感じました。

今回、研究を通して今まで見ていた風景がより濃く、はっきりとした輪郭線を持ちました。毎日なんとなく通っていた時間が愛おしく貴重な時間になりました。水戸の街に、バスが通るこの場所に大きな愛着を感じます。

私の通学路、今日もバスは城下を走ります。

完

主な参考文献：「水戸百年」水戸市100年委員会(1989年)・「古地図と歩こう！水戸の城下町マップ 幕末版」小野寺淳著(2015年)・「水戸の町名/地理と歴史」(改訂版1985年)水戸市立図書館デジタルアーカイブシステムより・「吉田松陰と水戸」仲田昭一著(2015年)・「写真紀行 天狗党追録」室伏勇著(2001年)・「天狗党が往く」光武敏郎著(1992年)・「天狗争乱」吉村昭著(1999年)「水戸工兵隊小史～記念碑建立に際して～」水工会編(1968年)・「茨城陸軍諸部隊の足跡」茨城郷土部隊資料保存会編(1978年)